

報告する次第である。

すなわち、「翻経記」を偽撰とする論拠を示せば、以下の三点に集約される。

(1)品数の問題。訳出当初の『妙法蓮華経』は提婆達多品を欠く二十七品なるものであるが、「翻経記」では、訳出当初の『妙法蓮華経』を二十八品と記している。(2)普門品の偈の問題。普門品の偈は、先行する二本の漢訳、すなわち『正法華経』と『妙法蓮華経』とは訳出されておらず、『添品妙法蓮華経』以降にはじめて追加されるものであるが、「翻経記」では、『正法華経』に普門品の偈が存すると記している。(3)所依梵本の問題。「翻経記」では、鳩摩羅什の『妙法蓮華経』と婆藪槃豆の『妙法蓮華経優婆提舍』（敦煌出土写本の題記に大魏永安元年「五二八年」とあることから、漢訳の年代が推定される）との所依梵本が同じであると記しているが、『妙法蓮華経優婆提舍』に引用されている経文を抽出し『妙法蓮華経』と対比することによって、両者の所依梵本が異なることが確認できる。ゆえに、既成の歴史事実に相反する以上の三点に基づいて「翻経記」の偽撰説は証明できるものと考ええる。

さて、「翻経記」の作者については僧祥の創作か或いは別人の述作か不明であり、また、述作の経緯や目的に関しても明らかではないが、記事の内容からして、「翻経記」述作当時の『妙法蓮華経』の正当性を主張し、それを意図してのことであると考えられる。とくに、訳出当初の『妙法蓮華経』を二十八品とすることから、「宝唱録」に典拠をおいたことが指摘できる。さらに、撰述年代については、出典と目される文献のなか

で、栖霞の『法華經玄賛要集』（唐乾符年間）が最も新しく、日本に現存する『法華伝記』の最古の伝本が大治五年（一一三〇年）に書写されていることから、九世紀の後半から十二世紀の前半の間と推定することができる。

これらの諸問題に関して、詳しくは、拙稿「僧肇記「法華翻経後記」偽撰説の全貌と解明」（『仏教学論集』二七号、二〇〇九年）を参照されたい。

『法華驗記』にみる

いわゆる「妙法経力」の諸相

間 宮 啓 壬

平安中期の天台僧・鎮源の編纂になる『法華驗記』がいわゆる「持経者」研究の格好の素材となってきたことは、周知の通りであるが、今回の発表の場合、関心の対象は、「持経者」ではなく、その「持経者」らが担うもの、つまり『法華経』の側にある。すなわち、『法華経』を信じ担う者にとって、『法華経』という経典はいかなるものとして意味づけられたのか、という問題関心である。こうした関心のもと、『法華驗記』を素材として取り扱った先行研究は、意外なことに殆ど見当たらないが、そんな中で、宗教学者の華園聰磨氏による見解は注目に値する。氏によれば、『法華驗記』に描かれる『法華経』はまさに「力あるもの」であり、その『法華経』の力こそ、登場人

第6部会

物も信仰の動機も多種多様で多元的である『法華驗記』の内容に統一性・普遍性を与えているという。ただ、華園氏の場合、関心は、『法華經』の力の側ではなく、『法華經』との関わり方である「受持・読誦・聴聞・書写」の意義と機能の分析に置かれているが、私、間宮の場合は、まさに『法華經』の力の側に置かれることになる。すなわち、『法華經』の力、いわゆる「妙法経力」とは、果たしていかなるものとして発現し、いかなる影響力をもたらすものとみなされているのか、といった問題を、『法華驗記』を材料として素描してみたいと思うのである。

『法華驗記』の「二七」や「四八」等の話（一）内の数字は『法華驗記』の話数を示す）は、「經の力用」「經の威力」等といわれる「力」が『法華經』には備わっており、その力は行者の行業を通して発現されるとみなされていることを、よく物語っている。これらの話では、『法華經』の力は現世利益的な力として描かれているが、「時に翁和尚、法花經に白^{まう}して曰く、永年の間、法華を持ち奉れり。これ現世のためにあらずして、後世菩提のためなり」（二〇九。傍点引用者）という言葉が端的に示しているように、それは、「後世」のために發揮される力―「後生善処」的な力―でもある。一々の事例を挙げることは、紙数の関係上できないが、その力の本質は、六道・十界的秩序における存在のあり方に、生をまたいで上昇をもたらす力であり、それは、『法華經』との直接的・間接的な接触によって働くものである。その力はまた、滅罪のための力でもあり、その滅罪を前提として、後生における存在のあり方の上昇を可

能にする力として働き得るものである。なお、かかる力は、滅すべき罪が膨大である場合、六道・十界的秩序における存在のあり方の著しい転落をくい止める「転重輕受」的力として働くともなされていることも付言しておく（八六）。

かかる「後生善処」的な力が、一つの生の枠内で、存在状況の改善をもたらすものとして発現した場合、それは、「現世安穩」「現世利益」的な力とみなし得るものとなる。その力は、例えば、蘇生も含めた病氣治しを可能にする力として描かれているが（二七）（六六）（八七）（九一）（九七）（一二二）、のみならず、命が危険に晒された危機一髪の状態から救い出してくれる力としても描かれている（五四）（五七）（六八）（七二）（七五）（八五）（九一）（一〇七）（一〇八）（一一〇）（一一三）（一二四）（一二五）（一二三）。こうした力はまた、豊饒をもたらす力でもあり（四八）、その力が働くことによって早魃という危機的状況からの救いが可能になった、とみなされるのである（九一）。

『法華驗記』にみえる『法華經』は、意味内容が問われるべきいわゆる「テキスト」としての『法華經』ではなく、むしろ、力を担う「モノ」ともいうべき『法華經』である、といつてよからう。『法華經』が担うその力は、今生きているこの生が危機に晒された際に手を差し伸べてくれる力として、また、この生を終えて死を迎えた後のあり方にも決定的な影響力を及ぼしてくる力として、描かれているのである。